



# 物語の中の先

---

---

芳田尚哉

---

## 物語の中の先

---

「これ読んでみろよ」

久しぶりに会った小学校時代のクラスメイトから、一冊の本を渡された。

卒業以来会っていなかったので懐かしく、テンションが上がっていたのもあり、普段は本を読まないくせに受け取っていた。

「おう、ありがとう」

「それ、俺はもういらぬから、ゆっくり読めよ」

じゃあな、と言って去っていく。

まあ、暇つぶしにはなるだろう。くれるって言うし、ゆっくり読めばいいだろう。

ぱらぱらとめくると、文字だけだった。

「ちょっときついかも」

本といえばマンガでしょ。文字だけなんて信じられない。こりゃ下手に借りなくてよかったかも。速攻で返すか、借りたままになっていたところだ。

そんなこんなで借りた本だったが、とりあえず読んでみようと思い、ベッドに転がって読み始める。

どうやら電車で旅行でもしているらしい。そういう場面からだった。

「女の一人旅？ あいつ、どうしてこんなのをすすめるんだ？」

小学校以来というのものもあるけど、あいつの趣味がよくわからない。そもそもこの話が、どういふジャンルのものかわからない。

最初は電車の中の話で、特にこれといってないのだが、つい読んでしまう。

あれ？ 俺ってこんなだっけ？

面白いから次を読みたいというわけじゃない。だけど、どうしても読んでしまう。

いやいや、俺はこんな読書野郎じゃないって。そのはずなのに止まらない。

物語の中では、女が電車を降りて、目的の場所を探していた。どうやら場所がわからないらしい。

「確か実家じゃなかったか？ なんでわからないんだ？」

そんな疑問を感じたところで、読むのを中断する。

ふあああ〜、と大きなあくびが出る。

普段本を読まない俺が、これだけでも読んだのは奇跡だ。

ベッドで読んでいたせいか、ものすごい眠気が襲ってくる。うとうととして、すぐに眠ってしまった。

目の前には、見渡す限りの自然が広がっている。畑なのかただの原っぱかわからないけど、とにかく建物が見あたらない。

遠くには山が見える。

電信柱が唯一の人工物じゃないかと思える。だって、地面もアスファルトじゃない。今時、剥き出しの地面を見る事なんかない。

「つうか、ここどこだよ」

ぐるりと一回転すると、後ろに建物があつた。

「なんだ、ここ？」

その建物の屋根に、文字が書かれていた。

「なんとか駅？」

文字が消えかかっているほとんど読めないけど、そこが駅だという事はわかつた。しかし、不思議と線路がない。

「どうなってんだ？」

しかも、周囲には誰もいない。

「なんだか、どこかで見た事がある気がするんだよな……」

だけど、田舎があるわけじゃないし、林間学校でこんな場所に来た事はないはずだ。

じゃあ、どこで……。

「そうか、あの本だ」

さっきまで読んでいた本に、こんな景色が書いてあつた気がする。

「まさか、本の中……なわけないか」

そんなファンタジーっていうか、非常識な事があるはずない。

「とにかく、ここにいてもしょうがないのか」

駅とはいっても誰もいない。駅員さえいないし。

改札は自動改札じゃなくて、誰でも自由に通れる感じだ。っていうか、切符はどこで買うんだろう？ 販売機すらないぞ。

時刻表は……見ると、二時間に一本くらいしかないし。

ここ、本当に日本か？ そう思ってしまう光景が広がっている。

「つうか、誰もいないし、どうすりゃいいんだよ」

そもそも、どうやってここに来たんだ？

確か部屋で本を読んでいて……眠ってしまったはずだ。

「って事は、夢か？」

そう考えるのが妥当だな。

「ゲームしてたら、夢の中でもゲームしてたりするしな」

久しぶりに本なんか読んだから、そういう夢を見てしまってるんだ。

「っていうか、夢の中で夢だってわかるのって変な感じだな」

夢の中だとわかれば、なにをしても起きればベッドの上だ。だったら、せっかくだし色々見てみるのもありだろう。どうせ夢だし。

起きれば問題なくなるので、とりあえず歩いてみる事にした。このまま無人の駅にいてもしょうがない。

「まだこの続きは読んでないんだよな……」

なので、どう進めばいいのかわからない。でも、それは攻略本なしにゲームをしているようなもので、それはいたって普通なのかもしれないが、なんのヒントもなしにフィールド系のゲームはなかなか困難だ。なにせ、目的すらわからない。

「でもあの話の通りにすればいいとしたら、あの女の家に行けばいいのか。……って、それがどこかわかんねえよ」

その女ですら迷ってたのに、俺が知ってるわけがねえ。

誰かに訊こうにも人がいない。

「どうすりゃいいんだよ」

◇「どうしたんだい？」

途方に暮れていると、ほっかむりをしたおばあさんが話しかけてきた。◇

「なんだ？」

頭の中に文字が浮かんだ。

「どうかしちまったのか？」

近くには誰もいない。

◇「そうかいそうかい。ついておいで」

どうやら案内してくれるらしい。遠慮なくお願いします。◇

「なんだ？ まだだ」

また文字が浮かんできた。

「えっ？」

今度は文字だけじゃなかった。目の前に影が浮かんだ。その影は老婆の姿に見えた。

その影がゆっくりと動き出す。

「もしかして、案内してくれるのか？」

影だけが動いているという不気味さはなく、どうせ夢だからとしか思わなかった。

「ついていくか」

どうせ夢だし、目が覚めれば関係ない。そう思って、影についていく事にした。

影はゆっくりと歩いていく。両側にたんぼが広がる道や、山の中としか思えないような道を歩いていく。

都会とはまるで違い、まさに別世界のような道だった。

二〇分は歩いた頃に、大きな家が見えてきた。都会暮らしからは考えられない大きさと、昔ながらの平屋の木造家屋だが、豪邸のように見えた。

近くに建物はなにもない。周りには畑とかたんぼが広がっている。

「すげえ家だな」

見上げていると、どうやらここが目的地だったらしく、老婆の影は消えていた。

「それにしても、ここでなにがあるんだ？」

あの本の先はまだ読んでいないので、どういう展開になるのかわからない。

そもそも、ジャンルすらわかっていない。

「もしかして、官能的な展開とか……って、あるわけないか」

女の一人旅だったので、ちょっとだけ不倫相手がいたりとか、そういう事を考えてしまう。

「ここに入ればいいのか？」

ゲームだったら、勝手に家に入っていくわけだけど、さすがに夢とはいえそれはマズいだろ。

中から話声が聞こえてくるので、留守って事はないみたいだし。

インターフォンを探すがどこにも見あたらないので、恥ずかしいけど声をかける事にした。

「すみません」

周囲になにもなく静かなのでよく響く。

しばらく待っていると、とたたと誰かが走ってくる足音が聞こえた。

「んあ？」

眩しくて目を開ける。

「……はへ？」

目の前には見知った天井があった。

「朝……か？」

どうやらあの夢はあそこで終わりらしい。

「ちょっといいとこだったのに残念」

続きが気になるところで終わってしまった。

「もう少しだけ夢の中でもよかったんだけどな」

そう思った時、時計が目に入る。

「おわっ、遅刻じゃねえか」

遅刻ぎりぎりの時間だった。もうちょっとでも夢の中なら、完全にアウトだ。今でも、ダッシュしてなんとかギリギリってとこだ。

「やべっ」

ダッシュで着替えて、鞆に荷物を詰め込んで、一気に玄関に向かう。

「いってきます」

外に出ると、太陽の光が眩しかった。その光に一瞬だけ目がくらむ。

その次の瞬間、目に影が入り込んだみたいな感覚に襲われる。

「なんだ」

その影が次第にはっきりしてきて、それが文字だとわかる。

「なんだなんだ？ どうなってんだ？」

まともに歩けないどころか、立っている事もできない。

完全にバランス感覚がなくなっていて、そのままどてんと地面に座り込んでしまう。

「おばちゃん、だれ？」

お、おばちゃん……？ まあ、未就学児からすればそうでしょうね。ちょっとヒクつく。

「大人の人はいるか？」

そう言うと、女の子は小首を傾げて戻っていく。

「変なおばちゃんが来たよ」

それを聞いて、大人が外に出てくる。母と同じくらいのおばさんだった。さっきの子と親子だろうか。そっくりだ。

「あらら、どちらさま？」

口に手を当て訊いてくる。

「私は、ここの家の……姪です」

「あらら、姪っ子さん。今はわたしたちしかいないんだけど……」

「まだ戻ってないんですか」

母の話では、もう戻っている感じだったんだけどな……。

「どうしたの？」

と、白い割烹着姿の女性が出てくる。

「この子、姪っ子さんなんですか」

「そうなの。じゃあ、一緒に宴会しましょう」

「そうね。それがいいわね」

私が動揺している間に、勝手に話が決まってしまう。

私は手を引かれ、中に連れて行かれた。、

目を閉じても、文字が流れていく。

「どうなってんだよ」

目をこすってもなにも変わらない。

その文字は道路いっぱいに広がっていく。

道にびっしりと文字が見える。

「まさかまだ夢なのか？」

そう思っても、あまりの気持ち悪さに吐きそうになる。その感覚でわかったが、どうやら夢じやなさそうだ。

「なんだよ、これ」

吐きそうになりながら、ゆっくりと歩き出す。

「どうなってんのかわかんねえけど、わかるとすればあいつしかいない」

これがあの本の続きなら、これをくれたあいつに訊けば、もしかすればなにかわかるかもしれない。

詳しい場所はわからないけど、記憶を頼りにそこまで行く事にした。

目に直接文字が浮かんでくる事はなくなったが、道いっぱいの文字は続いている。

「全員の視線が、まさに突き刺さるように向けられていたのだ。

「ひっ」

背筋が凍るような恐怖を感じた。

ここにいちやいけない。

そんな気がして、私は慌てて荷物を掴むと、玄関に向かって走り出す。

「ちょっと、どこ行くのよ」

女たちが追ってくる。、

「俺も逃げてる気分だな」

なんとか記憶を頼りに、あいつが住んでいたマンションを見つける。昔に来た事があってよかった。

入り口の郵便受けに名前を見つけると、その部屋を目指す。

建物の中に入ったせいなのか、時々文字が消える。その間だけ、気分が楽になる。

それでも、エレベーターから出る時は、思わず倒れそうになる。

壁に手を突きながら、その部屋まで歩いていく。

「着いた……」

なんとかインターフォンを押す。

「はい、どちら様ですか」

ドアを開けて、母親らしい人が出てきた。

「すみません、俺はのりあき憲明のおたゆうきくんと同じ小学校だった太田佑樹といますが、憲明くんはいますか？」

「……………憲明はいません」

言われてから、そういえば学校だよな、と思った。

自分だって本当は学校に行ってる時間だ。そんな時間にいるはずがない。

だけど、そうじゃなかった。

「憲明は、先月亡くなりました」

「……………」

亡くなった？ 死んだって事か？

一瞬、この人はなにを言ってるのかわからなかった。

「そんなはず。だって、俺は昨日――」

そうだよ。俺があの本を渡されたのは昨日だぞ。先月死んでるのに、どうしてそんな事ができるんだよ。

体から力が抜けて、膝から倒れる。

鞆の中身が外に出てしまう。

「大丈夫ですか？」

声をかけて支えてくれる。

「すみません」

「気分が悪かったら……」

そう言った声が止まった。どうしたのかと思って見ると、その人の視線はあの本に向いていた。

どうやら今朝、急いで荷物を詰め込んだ時に一緒に入れてしまったらしい。その本が、さっき飛び出たようだ。

「この本は……」

その人はその本を手取る。

そうだよ。この本が証拠じゃないか。

「それは――」

「この本は、あの子が持っていた……。でも、あの子のものじゃないって……。いつの間にか消えていて……」

ぶつぶつとなにか言っている。

「それは昨日、憲明くんからもらったんです」

なんとかそれだけを伝える。

「昨日、あの子から……？ そんなはずありません。あの子は……。でも、あの子も亡くなる前にこの本を持っていて……」

ちょっと待て。憲明が死ぬ前にこの本を持っていたのか？ それが今、俺のところにある。

それって……この本を持ってたら死ぬって事か？

そうだと思った時には遅かった。文字が目の前を覆い尽くしていく。

「うわあああっ！」

目をかきむしる。

それでも文字は消えない。

目を閉じても文字が消えない。

「うわあああっ！」

たえきれなくなって歩き回る。それがいけなかった。だけど、どうしようもできなかった。

歩き回ったあげく、通路の手すりを乗り越えてしまう。

そうなれば結果はわかりきっていた。

真っ逆様に落ちていく。

だけど、俺には文字の煩わしさしかなかった。それから解放されるなら……。

本を持ったまま学校に向かっていた。

放課後のこの時間は、多くの生徒が歩いている。

その中に、見知った顔を見つける。

「よお、久しぶり」

話しかけると、向こうも気付いたらしい。

「中学以来か」

「そうだな」



「どうしたんだ？」

「いやあ、ちょっとこの辺を歩いていてさ。そういや、お前って本、好きだったよな」

「まあ、わりと読む方だけど」

「これ、読んでみろよ。俺はもういないから」

Fino.

## 物語の中の先

<http://p.booklog.jp/book/111387>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/111387>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト